

平成24年度長期研修生研究報告概要

鳥取県教育センター 学校教育支援室

長期研修生 鳥取市立鹿野中学校 長井 順子

1 研究テーマ 「語彙力」を高め、豊かに表現できる生徒を育てるための指導法の研究

2 はじめに

「語彙力」とは、「自らのなかに蓄積された語彙のなかから、その状況にぴったり合う適切な言葉を選択し、相手に分かりやすく伝えることができる力」ととらえている。日常会話はもちろんのこと、学習の場面でも一部の使い慣れた言葉で安易に表現してしまいがちな生徒たちに、いかにして語彙力をつけることができるのかというのは、以前からのテーマであった。

3 研究目的

語彙力を身につけるためには、英単語のように言葉と意味を対応させて機械的に覚えるのではなく、言葉を自らの経験にくぐらせて理解しなければならない。また、言葉がどのようなカテゴリーに位置するのかを理解し、周辺の言葉との違いを明確にした上で適切な言葉を選択するというのは、繊細な感覚と高い意識が必要である。そこで本研究では次のような仮説を立て「言葉の使い分け意識を高めるための有効な指導法」について検証することとした。

研究仮説 「言葉の使い分け意識を持たせることで語彙力は高められる」

4 研究内容

(1) 継続指導 コラム学習『『語彙力アップ』への道』

●週末課題として新聞のコラムから問題を三問作成し、継続して取り組ませる。

【1 問目＝言葉を選択させる問題】

文章の内容から判断して()にあてはまる言葉を選択肢のなかから選ばせることで、**言葉の微妙さや豊かさを感じさせる。**

【2 問目＝選定語を用いた作文問題】

選定語を用いての短作文。**選定語は中学生に使えるようになってほしい言い回しや、微妙なニュアンスを加える言葉。**それを**3文構成100字程度**で書かせることで、**言葉を自らの経験に結びつけさせる。**教師の用例を必ず示す。

【3 問目＝語彙を広げる問題】

これまで使ったことのない言葉を書かせる。自らの語彙になかった言葉に注目させ、**多くの言葉に意識を向けさせるためのもの。**

◎提出させた課題は添削後返却。上手な生徒作文は印刷して紹介。

【選定語】
中学生に使えるようになってほしい言い回し
微妙なニュアンスを加える言葉

天声人語
皇のすまひがござい
で、冷感がわたり重宝して
る。(一) 慶を映
この店名は15年で回数をわ
た、徒歩3分ほどの間に、無
で強う同業が店、道すがら、
これはのおでんを誰買のか厚
超えたという。店をま
国内では、近頃、その
耗戦を勝ち抜いたこと
らしい。この三は、独
ビス着の消費をリ
業を置く店も増え、選出
をつかんでいる。宝麗
TM、防犯の駆け込み寺
イルの変化(即座)、先
有事に頼れる社会イン
された。総選挙は政
赤業は、縮人口と層層
だ。物を売るだけなら
便利はたり前、我らお
がない。大手は全重を
おでんの味をまいて、
りや弁治はさらに細い
おにぎりのコト早々と
植えの季節、内藤三男
には、砂漠のアサシの
う、旅先でなじみの震
った。風は、
この文章の中で、今までに使ったことのない表現が
あれば書きあげておこう。

3文構成100字作文で状況設定
し選定語を経験に結びつけさせる

教師の用例
(2) 「二重線部の「ならでは」という表現を使って三文構
成で百字程度の文を作りなさい。
「ならでは」という表現は、
やかになる。お店や個人の家に飾られた色とりど
りの電球を目にする、一気にクリスマス気分になる。
冬の寒くて長い夜を彩るイルミネーションは、この
時期ならではの楽しみである。

(1) 文章中の(一)「」にあてはまる語を、次の中
から選びなさい。
ア はかない
イ せわしい
ウ めまぐるしい
エ あわただしい

「語彙力アップ!」への道 十六
言葉の微妙さや豊かさを感じさせる問題

- 【成果】①問題 1 は選択問題ではあるがじっくり意味を考えなければ答えられない問題であり、同時に類義語を示したことで周辺の言葉を含めて考えさせることができた。
- ②「3文構成100字作文」としたことで、一文が長すぎることなく、具体的場面設定のなかで微妙なニュアンスにまで意識を向けた内容の作文練習ができた。
- ③教師や生徒の用例から、経験に結びつく様々な場面が示せた。

(2) 取り立て指導 全学年 5単元 全17時間実施

検証授業1 2年生「言葉を選ぼう」

- 【内容】 類似した二つの感情表現をそれぞれ使い、100字程度の物語を作らせる。
- 【ねらい】 類義語の意味を明確にすることで、語感を磨き、「使い分け意識」を働かせて場面にふさわしい言葉を使う感覚を身につけさせる。
- 【検証】 ●類似した言葉の微妙な意味の違いや使う場面によって適不適があることを理解させ、状況にふさわしい言葉を使う意識を持たせるために有効であった。

検証授業2 1年生「感じたことを文章にしよう～鑑賞文を書く～」

- 【内容】 好きな絵画作品の魅力を複数の観点で捉えて書かせる。
- 【ねらい】 自分が感じる作品の魅力は、どのような表現だと伝わりやすいのかを「感想・評価の言葉」を参考にしながら考え表現させる。
- 【検証】 ●「観点」を決めることは使う言葉を限定することであり、使い分け意識を働かせて言葉を選ぶことにつながった。
- 「感想・評価の言葉」を示すことで、より適切な言葉で表現しようとした。しかし、なかには言葉の意味も使い方も分からない生徒もおり、少し難しいと思われる言葉には用例をできるだけ示し、また単元に関係なく中学校3年間を通して使えるものとするため、語彙数を1160語に増やしたものを授業後作成した。



絵画作品の観点を考えるのに用いた「ムラン・ド・ラ・ギャレット」

(3) 意識調査

「どんな言葉を使うと、自分の伝えたいことがより分かりやすく伝わるだろうと考えることがあるか。-6月と1月の意識の比較-」

	(6月)		(1月)	
<1年>	77%	→	<u>80%</u>	↑
<2年>	79%	→	<u>85%</u>	↑
<3年>	71%	→	<u>91%</u>	↑

- どの学年も6月に比べて言葉を選んで使うことを意識するようになったことが分かる。また、1年→2年→3年とその割合が高くなっており、学年が上がれば獲得語彙数が増えるため、使い分け意識がより働くようになるのではないかと考えられる。

5 研究のまとめ

- (1) 「言葉の使い分け意識」を持たせる指導を行ったことで、言葉の持つ微妙なニュアンスに気づき、状況にぴったり合う言葉を使おうとする姿勢が授業後の感想や意識調査からうかがえた。
- (2) 3文構成100字作文は、一文を適度な長さにして状況設定を十分行い、言葉の微妙なニュアンスまで意識した作文練習ができる。
- (3) 「観点」を決めて表現することは言葉の使い分け意識を働かせることにつながる。
- (4) 「感想・評価の言葉」のように豊かな言葉を示すことは、言葉への興味関心を引き出し、適切な言葉を使おうとする使い分け意識を働かせることにつながる。

6 今後の課題

- (1) 生徒の「知りたい」「使いたい」という自己表現の欲求のなかで、言葉に出会い学ぶ機会をいかに多く持たせるかを念頭に置き、中学校3年間、年度、学年、単元での言葉の指導の見直しを持つ。
- (2) 教師自身が言葉の粹な使い手となることを目指す。
- (3) 語彙力を高めることで、良好な人間関係を築こうとする生徒を育成する。

7 おわりに

コラム学習の用例作りや生徒の短作文添削が、自身の語彙力を鍛えることにつながった。一つの世界を巡って、校内の国語の教員同士や授業のなかで生徒とともに言葉の具体的な使い方について日常的に話題にし、考えることこそが、言葉の使い分け意識を育てることであると思われる。